

序

田 村 実 造

本会元副会長、宮崎市定博士は去る三月を以て御在職久しい京都大学の講筵を去られた。本巻はその御退官を記念して博士の知友・門下のひとびとによって献呈された東西交渉史に関する研究特輯である。

東洋史学者としての博士の研究域は、中国を中心に東は日本・朝鮮から西はエジプト・シリアにおよび、およそアジアの全域をおおうが、西アジアとの直接の関係は『菩薩蛮記』の博士の自序の中に見えるように、昭和十一・二年以来のことのようである。博士はパリ留学中の昭和十二年九・十月の候、単身トルコ・シリア・パレスティン・イラク・エジプトなどの西アジア諸国への大旅行を敢行された。この旅行が西アジアに対する博士の学問的情熱をかりたてたようで、それはやがて「條支と大秦と西海」とか、あるいは「西亜細亞史の展望」（『菩薩蛮記』所収）とかの卓抜した論著として、多くの後進を誘掖することになった。

戦後京都大学文学部は、いちはやく西アジア・南アジア史学コースを設けて、従来わが国東洋学研究のうちでも最もたちおいていたこの方面の研究に力を注ぐことになり、今日このコースからは幾多新進の研究者を生みだしているが、これは全く博士の唱道によって実現したものである。

ここに『西南アジア研究』が博士を記念して第十四号を特輯することになったのも、これにより、いささかながらも博士の学恩に報いんためにほかならない。

(昭和四十年四月二十七日記)